

『唐詩解』の編著と出版について：唐汝詢の交友関係を中心に

陳, 禕璇
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7183036>

出版情報：中国文学論集. 52, pp.91-106, 2023-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



『唐詩解』の編著と出版について

——唐汝詢の交友關係を中心に——

陳
禕
璇

はじめに

唐汝詢撰『唐詩解』五十卷には、主に三つの版本がある。最も早い刊本は万曆乙卯序、一六一五年、三衢俞夢熊秀山氏梓行^①。万笈堂本は順治己亥序、一六五九年、武林趙孟龍重刻。三版は、雲間吳綏眉の訟懿藏本、即ち『刪訂唐詩解』、康熙辛巳、一七〇一年である。

しかし、これまでの調査により、『唐詩解』万曆乙卯序本には二種類の版があることが確認された。九州大学図書館所蔵の『唐詩解』は、陳繼儒と陳所蘊による二篇の序文のみを収録する。陳所蘊の序文は「萬曆乙卯仲夏之吉」と記す。一方、国立公文書館（内閣文庫）所蔵『唐詩解』には、さらに黄汝亨による序文が加わり、文末に「萬曆乙卯大雪日武林寓生」と記す。さらに、この二本には「附同社友人」の部分にも異同がある。従って、『唐詩解』は、万曆年間に少なくとも二度出版されたと考えられる。

『唐詩解』原刻本が二度も出版された要因は、当時の江蘇・浙江地域の出版業の繁栄と關係がある。しかし、『唐詩解』五十卷は、二〇一人、一五四六首の作品を収録し、しかもその大半の詩歌に詳細な語注と唐汝詢自述の評釈を加えた画期的な唐詩選集である。その大量の編集作業を完遂して、上梓のために各所を奔走するのは健常者にとっても困難なことである。ましてや無位無官で、しかも盲目の唐汝詢にとってはなおさらである。

編集者の唐汝詢は、どのようにして『唐詩解』の原稿を完成させたのか、そして、またどのようにして『唐詩解』

『唐詩解』の編著と出版について

を出版できたのか、それらについて、未だ解明されていない問題が多く残っている。そこで本稿は、唐汝詢の事績とその交友関係について、調査し得たことを報告するものである。

一 「雅社」の設立

唐汝詢は、華亭（現上海市西南部）の人、拔群の記憶力と優秀な文学才能によって、多くの学説を書き留め、盲目の市井文人として広く知られている。目の見えぬ彼は音読のみによって学問を修め、『唐詩解』五十巻を著した。もとより、自分の力だけで『唐詩解』の出版を実現させるのは、不可能である。従って、彼は家族のみならず、社会各界からも支援を受けたに違いない。

このうち、最初に手を差し伸べたのは、彼を取りまく文学社の友人たちである。唐汝詢は、詩文集で、華亭で親友と文学社を設立したことについて、次のように記述した。

乙卯歲杪、偶憩海上、愁霖晦冥、客居寡歡。日與元常諸君悲歌相答、酒酣耳熱、愴然與懷。正以嘉會難長、良儔莫逆、藉非寄情高詠、奚以托好千秋。於是舉生平所與操瓢藝林、填箎築調合者得十二人為雅社、推長與先生為盟主。

（乙卯の年末、偶々上海に滞在した。鬱陶しい長雨の年末で、客居のつれづれに、毎日元常らとともに悲歌を作り、酒を飲み、悲しみに心を打たれた。そこで、佳宴と親友の貴重さを感じ、思いを詩歌に寄せ、作品を後世に残すべきだと考えた。そこで詩歌の創作に熟達している十二人を集めて雅社を設立し、長與先生を盟主とした。）

（「雅社約」、『西陽山人編蓬後集』卷十五）^③

これによると、雅社の設立は万曆乙卯（一六一五年）である。最初の構成員は唐汝詢を含む十二人で、盟主は張所敬である。社員たちはこの同年に刊行された『唐詩解』の校閲と参定にも率先して協力している。簡略に示せば、

以下の通りである。⁴⁾

- 張所敬 (字長與) 『唐詩解』 卷八參定者
吳山民 (字逸一) 『唐詩解』 卷四十參定者
潘 羲 (字上民) 『唐詩解』 卷三十九校閱者
沈弘之 (字茂之) 『唐詩解』 卷二十七校閱者
張積仁 (字元里) 『唐詩解』 卷三十三校閱者
張積祥 (字元應) 『唐詩解』 卷十一校閱者
張積源 (字聖清) 『唐詩解』 卷十一、卷二十四校閱者
唐陳彝 (字元常) 『唐詩解』 卷十五、卷二十三校閱者
王世榮 (字玄超) 『唐詩解』 卷三十九參定者
倪甫隆 (字茂甫) 『唐詩解』 卷二十四參定者

とりわけ、盟主の張所敬は中心的な役割を果たした。まず、張氏一族は『唐詩解』の出版に重要な力を貸したと考えられる。陳繼儒に「唐詩解序」によれば、援助者に関して以下のように記述し、そこから張所敬の弟、張所望に関する記述も確認できる。

太守周翰許公、延見賜粟帛。塩使者修齡楊公、旌其廬曰「耳學淹通」、又捐俸爲君刻『唐詩解』。而陳子有問卿、張叔翹參知、諸君爭資助之。

(太守の許周翰は、面会して粟帛を贈った。塩使の楊修齡は、その廬舎に「耳学淹通」の匾額を贈り、『唐詩解』の刊行のための資金を寄付した。また太僕卿の陳子有、參知の張叔翹等の諸君も先を争って援助した。)

(陳繼儒「唐詩解序」、『唐詩解』卷頭⁵⁾)

『唐詩解』の編者と出版について

「張叔翹參知」は、即ち張所望である。張所望、字は叔翹、松江府華亭（上海市）の人。万曆二十九年（一六〇一）の進士。衢州知府、広西副使、左江參政などを歴任した。『閱耕録』、『埽田録』、『龍華里志』などの著作がある。また、張所望は『唐詩解』巻一の校閲者、巻二と巻四十五の参定者でもある。

そのほか、上記の校閲者の名録に挙げられた張積仁、張積祥は張所敬の息子で、張積源は張所敬の甥（張所望の息子）である。

話を張所敬に戻すと、雅社の盟主と唐汝詢の親友として、彼は『唐詩解』の編纂と出版を援け、重要な役割を果たしたと考えられる。

『松江府志』によると、張所敬、字は長與、上海龍華里の人。代々儒学をなりわいとする家に生まれた。張所敬は小さい頃から文学の才能があると称賛され、二十歳の時に当時の上海県の生員になった。この時の同僚に陳所蘊がいる。しかも古文が得意なため、王世貞に推賞されたこともある。張所敬の文壇での声望に関して、『雲間志略』では、以下のように述べている。

以詞賦狎主齊盟、詩得孟襄陽・李供奉之脈絡、晚年直逼杜少陵堂奥、文則非先秦兩漢不道只字。海内名公巨卿莫不知海上有長輿先生。而王弇州司寇極相推重、至於李濟南・汪新安之間。

（張所敬は、詞賦を以て文壇の盟主となった。その詩は孟浩然と李白の風格を得ており、晩年には直ちに杜甫の堂奥に逼る迫力があつた。先秦兩漢に非ざれば文として認めず、国内の名士たちに名を知られた。王世貞は、極めて彼を推尊し、李攀龍や汪道昆に匹敵すると評価した。）

（何三畏「張文学長與先生傳」、『雲間志略』巻二十）

ところで、先述のとおり九州大学所蔵の『唐詩解』は二篇の序文があり、その作者は陳所蘊と陳繼儒である。唐汝詢は自ら陳繼儒に手紙を送り、『唐詩解』の序文を依頼したことがある。しかし管見の限り、唐汝詢が陳所蘊と面会し、あるいは書信などを交わした形跡は見出せない。故に、陳所蘊と同じ上海出身で、名も知られていた張所敬

が、唐汝詢に代わって、唐汝詢を紹介し、『唐詩解』の序文を依頼した可能性が高い。

張氏一族も当時、松江地域の名家であった。張所敬自身の声望が加わり、現地での影響力を生かして、『唐詩解』出版のための組織作りを行ったと考えられる。

勿論、人々が唐汝詢を援助した根本的な理由は、彼の優れた才能と特殊な境遇に心を打たれたからである。しかし、張所敬一族と雅社の友人の応援がなければ、『唐詩解』の出版は決して実現しなかったであろう。

二 雅社と『唐詩解』の編纂

張所敬の詩文が王世貞に推賞され、李攀龍・汪道昆らと同等の文人だと認められたことから見れば、彼も古文辞派に属し、唐汝詢と雅社の構成員も復古の説に従っていたと見てよい。

たしかに、同時期の文人も、これまでの研究者も、一貫して唐汝詢を古文辞派の一人だと判断している。たとえば、かの錢謙益は「唐瞽者汝詢小伝」で、「兄の汝諤は、李攀龍と王世貞の学説に傾倒していたので、唐汝詢もこれに倣い雲間の流派に属するであろう。」と述べている。¹⁰⁾

しかし、「雅社約」によると、雅社の文学理念は、古文辞派と公安派の性靈説、二つの理念を折中したものである。

吾明詩格愈變愈下、于鱗尚聲調而影響蹈襲之弊、與中郎任才情而俚俗險怪之寶。鑿夫白雪黃金、既以起人之厭、而車車馬馬、詎謂得詩之神。近來年少毀李師、袁勢當然矣。然所造句非饑犬餓貓、即劓之蛙出、此又步驟中郎而駢拇者也。吾黨需痛革此弊、以古人為式、性情為用。

（我が明代詩歌の品格は、次第に劣ってきている。李攀龍は声調を尚び、古文踏襲の弊害を招いた。袁宏道は才情に任せて、言葉遣いは低俗で怪異である。それぞれの詩論は既に人々の不快を招き、それらの詩作は詩の本質が理解できたとは言えない。近年は李攀龍の説が衰え、袁宏道の説に勢いがあるが、それによって、詩作は

『唐詩解』の編者と出版について

読むに堪えない下等な作である。我が詩社の者は、これを徹底的に改め、古人の格律を尊び、また今人の性情をうまく表現するべきである。）

〔「雅社約」第一条、『西陽山人編蓬後集』巻十五〕

「雅社約」によると、成員たちは、復古説と性靈説、双方の平衡を取り、盛唐詩文を推尊すると同時に、明代文人の情感と胸懷を述べるような詩文を書くことも目指している。社約の中に、定期的な集合宴会や文学交流を規定し、詩を吟じ、互いに詩歌を参訂することを奨励している。『編蓬集』と『編蓬後集』の詩作から見れば、唐汝詢も頻繫に雅社の活動に参加し、構成員と接触していたことが確認できる。すなわち、唐汝詢の初期の文学活動は、主に雅社を巡って展開されていたのである。

従って、雅社の文学趣旨も構成員との交流も唐汝詢に影響を与えたと考えられる。例えば、『唐詩解』が『唐詩品彙』を参照して編纂したため、「詩人爵里詳節」の一部分は、ほぼそのまま転写したが、他方で内容を書き換えることにより、詩人の境遇への同情と武后への批判を示している。

駱賓王、義烏人。七歳能賦詩。武后時、數上疏言事、下除臨海丞。快不快樂、棄官去。徐敬業起兵、署為府屬。（駱賓王、義烏の人。七歳で詩を作ることができた。武后の時、數回上疎して、臨海丞に左遷された。不満があつて、官位を辞退した。徐敬業が挙兵すると、駱賓王はその幕僚となった。）

〔『唐詩解』序卷・詩人爵里詳節〕

『唐詩解』に載せる駱賓王の小伝は、『唐詩品彙』から直接引用したものである。しかし、『唐詩品彙』は「徐敬業乱」と事件を述べ、徐敬業の行為を謀反だと定義し、駱賓王を反逆側だと判断している。それに対して、唐汝詢は「徐敬業起兵」という褒貶の色彩を持たない単語を用いて、細かな変更を加えたことを通じて、自分の立場を表明した。唐汝詢は、政治への関心が薄いが、常に詩文を通して詩人の遭遇に同情を寄せている。そのため、詩人に関する

る不利な情報を書き改めた。

また、唐汝詢は古文辞派が最も推賞する李白・杜甫に対しても、批判的な意見を述べている。

五・七言古俱有長篇、而李・杜五言、似乏古雅、故並不載。

(五言・七言の古詩ともに長篇が有るが、李白・杜甫の五言古詩は古雅が足りないため、掲載しない。)

〔唐詩解〕序卷・凡例

しかしながら、唐汝詢はむやみに盛唐詩を否定するではなく、高棟の分類に対して冷静な再評価も行っている。

唐人詩中有絶類楚辭者、如太白鳴皋・摩潔山中之屬、語既參錯、調亦不倫。又退之琴操有通篇四言者、高氏並目為七言古詩、失制殊甚。

(唐人の詩の中に楚辭によく類似する作品がある。李白の「鳴皋歌送岑徵君」と王維の「送友人歸山歌二首」(其二)「山中人兮欲歸」は文字数が不揃いで、語調も脱俗超凡である。また韓愈の「琴操」は全篇を通して四言で、高棟が七言古詩に収録したことは、正しくない。)

〔唐詩解〕序卷・凡例

更に、『唐詩解』の選詩状況を他の明代唐詩選集と比較することにより、唐汝詢がその文学的審美観をいかに貫徹したかがより鮮明になる。

唐汝詢は、高棟や李攀龍と異なり、中唐の詩人白居易を推賞した。高棟の「格調扁而不高」との主張とは逆に、「同李十一醉憶元九」を例に、「語尚真率」、「豊格猶存」などと高い評価を与えた。また、当時の主流であった詩集が重視しなかった「長恨歌」をも収録し、唐玄宗と楊貴妃との恋愛譚を通じて、唐玄宗が方士に騙されたことを注釈に示し、その諷刺性を指摘した。

『唐詩解』の編者と出版について

盛唐詩人への批判と肯定であろうが、白居易への推賞であろうが、唐汝詢は『唐詩解』で客観性を求めながら、敢然と独自の意見を述べた。それはまさに雅社の、復古と性霊を双方重視する理念に一致している。故に、唐汝詢にとって雅社は、最初の文学活動の拠点であり、その文学理念の雛形が作成された場所でもあったのである。

三 唐汝詢の旅と交友

唐汝詢は両眼の光を失い、行動は不自由であったが、実は旅行好きで、新しい場所に対して冒険心と探求心を持つ人であった。唐汝詢は『唐詩解』の編纂のかたわら、各地を旅し、その体験をもとに詩を創作している。これらの詩作から、友人との交際や旅した場所が確認できる。

① 上海近郊

機山 「機山懷古」〔『編蓬集』卷六〕

金彙塘 「歲杪滯舟金彙塘」〔『編蓬集』卷十〕

蟠龍塘 「秋日泛舟蟠龍塘」〔『編蓬集』卷四〕

佘山 「宿佘山僧舍」〔『編蓬集』卷五〕

細林山 「宿細林山」〔『編蓬集』卷六〕

② 杭州及びその近郊

錢塘 「錢塘客舍」〔『編蓬後集』卷三〕

西湖 「宿錢塘三首」〔『編蓬後集』卷五〕

嚴陵 「暮春訪臧博士晉書、因陪諸君、同泛西湖」〔『編蓬後集』卷十〕

秦望山 「嚴陵釣台」〔『編蓬後集』卷六〕

秦望山 「登秦望山、因過吳山人幽居」〔『編蓬後集』卷二〕

③南京

「將赴鍾陵、留別家兄士雅二首」（『編蓬後集』卷六）

「去鍾陵陸行、次東鄉縣客舍、失足墜樓、迷臥者久之」（『編蓬後集』卷六）

「鍾陵途中述感」（『編蓬後集』卷二）

「題鍾陵官舍壁」（『編蓬後集』卷二）

「曉發鍾陵」（『編蓬後集』卷二）

④蘇州

「金閭有感」（『編蓬後集』卷二）

「憩金閭、市書不售、因題」（『編蓬後集』卷五）

「金閭訪林若撫」（『編蓬後集』卷五）

江蘇・浙江地域は、水路網が縦横に走り、舟旅に適していた。そこで唐汝詢も休暇を利用し、長男の孟莊を伴って周遊することがあった。そこで、旅に関する詩作について、『編蓬集』と『編蓬後集』の収録状況に注目したいと思う。『編蓬集』所収の旅に関する詩は、上海域内（当時の松江地域）で、上海域外の詩作は全て『編蓬後集』に収録されている。従って、浙江や江蘇方面への遠距離旅行は、『編蓬集』の出版後に実現したと考えられる。

遠距離旅行の理由は、唐汝詢の家屋が火災に見舞われ、焼失してしまったからである。その詩「避火嘆」に事件の経緯が記されている。唐汝詢が友人の宴会に参加して帰家した後、真夜中近くに隣家で火事が起きた。唐汝詢は、家族とともに脱出したが、自宅は全焼したという。

唐汝詢は「宇内名山千万重、未信此身長不容。扁舟明日掛帆去、白茅結屋香爐峰。」（宇内の名山は千万重、きつと此の身は何処かに居場所があるだろう。明日は帆をかけて扁舟に乗り、香炉峰に茅屋を結ばん。）と「避火嘆」詩を締めくくった。このように思いかげず、人生の節目を迎えた唐汝詢は、各地の周遊を始めた。その間、唐汝詢は『唐詩解』の出版のため、『唐詩解』の原稿を携え、南京で許稚則と面会した。

『唐詩解』の編著と出版について

助教許稚則、博士楊文弱俱好詩文。唐西陽往候之、持『唐詩解』一部謁許。許延入、坐未定、許曰、書未及看、先質所疑。適讀『文選』「枯桑知天風、海水知天寒」、此二語何解。唐曰、枯桑無葉、豈知天風。海水不冰、豈知天寒。許拊掌曰、此異人也。不必驗其所著矣。自此遂為相知。

(助教の許稚則と博士の楊文弱は俱に詩文を好む人であつた。唐汝詢は許氏の所に行き、『唐詩解』を持ち、謁見した。許氏は唐汝詢を迎え入れた。腰を下ろす間もなく、許氏は、「本はまだ読んでいないが、先に質問する。先ほど『文選』を読んだが、「飲馬長城窟行」の「枯桑知天風、海水知天寒」の二句は、何と解するか」とたずねた。唐汝詢は、「枯れた桑には葉は無い、どうして天の風を知らうか。海水は凍らない、どうして天の寒さを知らうか」と答えた。許氏は手を打つて、「この人は異人だ。その著作を検証する必要はない」と称賛し、唐汝詢と知己になつた。)

(吳履震『五茸志逸隨筆』卷二)¹⁵⁾

許令典(一五六七〜一六三一)、字は稚則、号は同生、靈泉羸史、兩垞外臣、海寧袁花人など。彼は万曆丁未年(一六〇七)の進士で、上饒県令、無錫県令、淮安知府を歴任した。晩年は海寧黄山の山麓に住み、東垞、西垞の小阜を築いて生活した。書を得意とし、『許淮陽集』八卷、『靈泉羸史集』『淮陽志』、『金牛隨筆』などを著した。

許令典と唐汝詢との面会は、恐らく『唐詩解』に関わるものだと思われる。唐汝詢は、『唐詩解』の出版と販売のため、南京に滞在していた。しかし、よそ者の唐汝詢は、南京の文学圈に馴染んでおらず、知名度も低かつたのであろう。許令典を訪問する際に、『唐詩解』を持参したのも、自薦の意図からであらう。

この面会を契機に、二人は意気投合し、親友となつた。その後、『唐詩解』も順調に出版され、その出版と販売のために役人が告示を出したことさえある。¹⁶⁾

また、唐汝詢は、許令典の誘いに応じて南京に引越し、住宅を借りて定住して可賦亭を築いた。

余自乙卯至白下、與許稚則先生訂移家之約、明年挈妻往。稚則有屋數椽、在秦淮之畔、駕橋通行、榜曰圮上。

旁有隙地、可容一室、就地作六角草亭、顔曰可賦。

(私は乙卯年〔一六一五〕、南京に着き、許稚則と住居の契約をし、来年は妻を連れて行く予定である。許氏は秦淮河のほとりに数棟の家を持っている。橋を架けて通行し、圯上という名がある。傍らに空地があり、一室を築くことができる。そこに六角の草亭を作り、可賦亭と名付けた。)

(唐汝詢『西陽舌瑣』「可賦亭佳會」⁽¹⁷⁾)

唐汝詢にとって可賦亭は、文人や名流たちが文学交流と宴会を行い、上海の雅社とともに、重要な場所となった。場所となった。ここに、唐汝詢の南京滞在期の交友関係と文学活動が見える。⁽¹⁸⁾

時儀部黃貞父、比部張雨若、水部劉王受、國博許稚則、參軍王體鹹・王湘客、他若大宗伯李本寧、大行人鍾伯敬、俱以休沐客遊。每春秋佳日、諸公至此、歌笑談文。亭旁設網、得魚即以供客。觴詠流連、亦一時勝會也。
(当時、儀部の黃貞父、比部の張雨若、水部の劉王受、國博の許稚則、參軍の王體鹹・王湘客、他に大宗伯の李本寧、大行人の鍾伯敬、俱に休暇を取り、客遊する。春秋の佳日には、ここに集まり、歌い笑って詩文を論じた。可賦亭の旁らでは、漁網を打ち、魚を得れば、直ぐに客人に提供する。酒を酌み交わして、次々に詩歌を吟じ、当時の素晴らしい文雅の会となった。)

(唐汝詢『西陽舌瑣』「可賦亭佳會」)

ここに言及される黄貞父こそ、万曆乙卯の冬に『唐詩解』に序文を寄せた黄汝亨である。

黄汝亨(一五五八―一六二六)、字は貞父、錢塘の人、万曆二十六年(一六二五)の進士、西布政司参議を務めた。進士になる前に、彼は秋水社など多くの文社に参加したり組織したりしたことがあり、それを通じて、人を募り八股文の選本を編集したこともある。故に、彼の経験や知識は、唐汝詢の出版の最終段階で大きな力となったことであろう。

『唐詩解』の編者と出版について

四 『唐詩解』の出版

雅社及び南京の友人たちは、『唐詩解』の校閲に参加したり、序文を書いたり、大きな力となった。しかし、それでもなお『唐詩解』出版には資金が足りず、唐汝詢は危機に陥った。友人からの募金も受けたが、焼け石に水である。この決定的な時期に、一人の重要な人物が現れた。

鄭父母自青陽調華亭時、吾鄉諸公助余刻唐詩解、僅完其半、不能卒業、乃質其板于嘉禾姚孝廉。得五十金以完工、但板在姚處不能印行。時楊文弱爲南雍博士、走書于鄭、托以緩急。時適編審、果以五十金相贈、得贖板以廣其傳、亦玉成之雅贖也。

（知事の鄭氏が青陽より華亭に転任した時、我が同郷の諸公は『唐詩解』の刻板作りを助けていた。まだ半分しか完成していない状態で、刻板を抵当に嘉禾の姚孝廉から五十金を借りて完成したが、刻板は姚氏のところに置かれたままで、印刷ができない。当時、南雍博士の楊文弱は、鄭氏に手紙を送り、危急を助けることを頼んだ。折よく編審の時に、鄭氏は五十金を贈ってくれた。そのお蔭で刻板を請け出すことができた。『唐詩解』が出版でき、広く読まれているのは、鄭氏の贈与と保全のおかげである。）

（『酉陽舌瑣』「贈錢贖書板」）

文中で言及される楊文弱とは、楊嗣昌である。楊嗣昌（一五八八〜一六四一）、字は文弱、湖広武陵（現在湖南省常德市）人。彼は万曆三十八年（一六一〇）の進士で、その後、杭州府学教授、南京国子監博士、戸部福建司主事を歴任した。知事鄭氏に手紙を送っていることから、一六一三年から一六一四年の間の、南京国子監博士であった時期のことであろう。

また、楊嗣昌が連絡した知事鄭氏についても、身分と功績が確認できる。

『唐詩解』巻一の冒頭に「侍御楊鶴命梓、司理吳之甲・邑侯鄭元昭會訂」という記述がある。

鄭元昭（生卒年未詳）、臨川県（現在江西省撫州市）の人、楊嗣昌と同年の進士である。万曆三十九年（一六一一）から万曆四十一年（一六一四）まで、青陽県の知県を務めた後、華亭に転任した。¹⁹この経歴は、唐汝詢の記述と一致しておる。

鄭元昭のほか、上述の侍御楊鶴と司理吳之甲も『酉陽舌瑣』に言及が見える。

司理吳茲勉、雅好文學、在署每閱書至夜分。友人張茂卿以予集送人、即遣吏相邀、遂成知己。每一進見、必論究文史、良久乃出。時予刻『唐詩解』、公即以所寫刻樣、送到鹹臺楊修齡、楊饋千金助刻、贈匾惠弊、榜曰耳學淹通、後亦稱契厚焉。皆吳公吹噓之力也。

（司理の吳茲勉は文學を好み、よく官署で深夜まで本を読んでいた。友人の張茂卿は、彼に私の詩集を贈った。吳氏はそこで吏員に命じて私を呼び寄せ、知己になった。私たちは会うと必ず長い時間をかけて文史を討論する。当時、私が『唐詩解』の刻本を作ったとき、吳氏はその見本を御史の楊修齡に贈った。楊氏は私に千金と「耳学淹通」と書いた匾額を贈ってくれた。その後、楊氏との交流も密接である。それは全て、吳氏の推輓のおかげである。）

（『酉陽舌瑣』「延見吹噓」）

司理の吳茲勉は、即ち『唐詩解』卷一冒頭の吳之甲である。吳之甲（一五八一年生、卒年未詳）、字は元秉、号は茲勉、臨川県の人、万曆三十八年（一六一〇）の進士である。彼は鄭元昭と同郷であり、かつ鄭元昭及び楊嗣昌と同年の進士である。『華亭県志』によると、吳之甲は、²⁰万曆三十八年（一六一〇）から華亭県の知県をつとめた。万曆四十一年（一六一四）、鄭元昭がその職務を引き継いだ。

吳之甲の推薦によって唐汝詢のことを知った楊鶴について、その事績を重ねて確認することができた。

楊鶴、字は修齡、湖廣武陵（今湖南常德）の出身、万曆三十二年（一六〇四）進士になり、初めは洛南知県を務め、万曆四十年（一六一二）御史に抜擢された。崇禎元年（一六二八年）、左僉都御史に昇進し、その後、兵部尚

『唐詩解』の編著と出版について

書、太子少保に遷る。

また、楊鶴は、楊嗣昌の父である。しかし、唐汝詢を彼に推薦したのは、息子の楊嗣昌ではなく呉之甲である。彼らが面識を得た順序については、はじめ、呉之甲が唐汝詢と親しくなり、呉之甲が楊鶴に唐汝詢を推薦、その後、呉之甲あるいは楊鶴が楊嗣昌に唐汝詢を紹介し知り合いになった、と考えられる。

まとめ

明代末期、文学社がしばしば設立され、各地方での文学の創作が飛躍的に増大したため、唐詩選本の編纂も極めて盛んな状況となった。生員や童生の身分で著述を生業とした者も多数存在する。しかし、唐汝詢は、目が不自由なため、科挙はおろか、童試すら受ける資格がなかった。受験もな叶わず、当時の社会が定義する文人ですらなかったのである。

しかし、唐汝詢は、積極的に当時の文人たちと接触し、その文学圈に入り込むことができた。その秀でた記憶力と文章力が人々の驚嘆を呼び、当時の官僚や文人に認められたのである。雅社の文学活動は、唐汝詢の文学理念に影響を与え、『唐詩解』の校閲のための仲間を集めた。南京での許令典や黄汝亨との交流、楊氏父子と呉之甲、鄭元昭の出会いも、唐汝詢の知名度を高めた。これらの出来事を経験したからこそ、さまざまな方面から援助を受け、かくして『唐詩解』五十巻は無事に刊行の運びとなったのである。

注

- (1) 『唐詩解』（九州大学所蔵原刻本）巻五十の巻頭に参照。
- (2) 内閣文庫本には「附同社友人」の項の「朱長芬」の下に「朱長芳」の名が補入されている。
- (3) 唐汝詢『西陽山人編蓬後集』（内閣文庫所蔵）巻十五「雅社約」参照。

(4) 『西陽山人編蓬後集』卷五の「寄懷社中諸友十首」参照。初期成員の十二人目は徐氏（字唐運はで、名は未詳）である。『唐詩解』の校閲者と参定者の名録では表示されていない。

(5) 陳繼儒『唐詩解序』、『唐詩解』（九州大学所蔵）参照。

(6) 『上海縣志』（早稲田大学図書館所蔵）巻九及び巻十参照。

(7) 『崇禎』松江府志（日本藏中國罕見地方志叢刊）（北京書目文獻出版社、一九九一年）下冊、一一〇〇頁参照。原文は「張所敬、字長與、上海龍華里人。世以孝友、詩禮禪其家學。敬自少有文譽、弱冠補弟子員、與陳太僕所蘊輩並曠執林、更以古文詞為王弇州所推重。」

(8) 何三畏「張文学長與先生傳」、『雲間志略』（臺灣學生書局、一九八七年）一七〇一頁参照。

(9) 唐汝詢『西陽山人編蓬後集』（内閣文庫所蔵）卷十三「與陳眉公」参照。

(10) 錢謙益『列朝詩集小伝』（上海古籍出版社、一九八三年）五二七頁参照。原文は「仲言之兄汝諤、篤嗜王李之学、仲言童而習之、故於其詩、未能超詣、蓋亦雲間流派如此。」

(11) 『唐詩品彙』（上海古籍出版社、一九八二年）「詩人爵里詳節」参照。

(12) 『唐詩解』（九州大学所蔵原刻本）卷二十九、「同李十一醉憶元九」評釈参照。

(13) 内閣文庫所蔵の万曆三十六年（一六〇八）出版された『編蓬集』と万曆四十六年（一六一八）出版された『編蓬後集』を主材料として、詩文の内容から唐汝詢の活動範囲を判明できたが、具体的な旅行時間に関する記述に乏しい。

(14) 唐汝詢『西陽山人編蓬集』（内閣文庫所蔵）卷三「避火嘆」参照。原文は「七月望雨冬未有、城中買水如沽酒。溝洫經旬潮不來、倉卒變生安措手。天災流行古有之、豈知波及西河叟。疇昔之夜天正寒、友人招飲杯常寬。半酣歸來臥未妥、鼎沸西鄰言失火。裳衣顛倒那復知、驚叫妻孥奔閭左。老妻猶思舊緼袍、覓之不得聲嗷嗷。大兒披衣不及帶、手抱幼弟呼天號。我亦倉皇計無出、但向加上收書帙。須臾煙焰天地昏、轉贖敝廬無一存。徘徊道傍待明發、赤腳踐霜皮肉裂。丈夫數奇誰使然、飢寒徹骨還權孽。宇内名山千萬重、未信此身長不容。扁舟明日掛帆去、白茅結屋香垆峰。」

(15) 吳履震『五茸志逸隨筆』（中国國家図書館）卷二参照。

(16) 唐汝詢『西陽山人編蓬後集』（内閣文庫所蔵）卷十「唐詩解成、晏黃門懷泉榜示書肆禁無翻刻、感而有贈」参照。

『唐詩解』の編者と出版について

(17) 唐汝詢『西陽舌瑣』（早稲田大学図書館所蔵）参照。

(18) 「可賦亭佳會」の記述の以外、唐汝詢は「次答章國博惠伯題可賦亭二首」、「次答張大理題可賦亭二首」、「次答沈比部相如題可賦亭」、「次酬吳逸一可賦亭歌」、「次酬王薊叔秋日過可賦亭作」、「次答徐儀部可賦亭作」などの作品がある。内容によると、当時の官員と文人が可賦亭で文学創作を行い、詩歌を残した。唐汝詢はそれらの詩作を唱和して、応答詩を作るとは常にある。

(19) 周贊『續修青陽縣志』（中国国家図書館所蔵）卷二、「官職志・知縣」参照。

(20) 『重修華亭縣志』（中国国家図書館所蔵）卷十一、「職官・知縣」参照。